

台本と台詞(1)

「棒読み」という読み方があります。初期のパソコンの読み上げソフトなどがそれに近いとおもうのですが、どんなドラマやお芝居でも棒読みの大根役者がウケルわけではありません。

パソコンを使った音楽の授業はまさしくこの棒読みの世界が中心で、入力するデータは「音高」と「音長」と「テンポ」「拍子」程度ですからあるレベル以下の状態の子ども達にとっては確かに自分の能力以上の結果が得られるため満足で楽しい学習行為だろうと推察されます。私も30年ほど前は固くそう信じて疑ったこともありません。

しかし、その当時からプロの演奏家又は音楽科教師からはこんな指摘を受けてきました。

無機質な電子音で音楽が表現できるはずがない。
血と汗のにじむプロセスを経てこそ芸術である。

確かにこのような指摘は今でも聞こえて来そうですが、当時私は敢えてこう反論してきました。

電子音であろうと原始音であろうと音や音の性質に何の違いもない。その証拠にCDやレコードを我々は音楽として聴いて居るではないか。あらゆる楽器音は人工音であり、その意味で電子音は不当に差別されない。

芸とか術とかに伴うスキルやテクニックの習得のために貴重な学校教育の時間を割くことはできない。そのような時間を生涯に亘って持ち続けるモチベーションを与えられることが学校教育の使命である

そして具体的にシンセサイザーを利用した授業のメリットとして、次のような実践報告を付けました。

- 1, 無限に近い楽器の種類にこだわらず音域や奏法に関係なく音楽的に模擬体験ができる
- 2, 移調楽器のために特別な楽譜を必要としない
- 3, 一人で異なる種類の楽器のパートであろうと簡単に体験できるのでアンサンブルの学習ができる
- 4, ヘッドホンが利用できる所以で個別学習が可能になると共にCD等の他の音楽ソースとの共演も可能
- 5, 全員が同じ聴き位置の再生音で聴けるので指揮者による音量指示やバランス指示は不要になる

しかし、それから30年電子アンサンブルが学校でのアンサンブルの主流になることはありませんでした。ただ、小学校における「アンサンブル・オルガン」は

バブル期を頂点として全国に普及しました。このことは小学生の音楽だからこの程度でも良いだろうとの安易な妥協があったからだけとは考えられません。

鍵盤ハーモニカという鍵盤楽器の学習が普通となり、リコーダーを簡易楽器と位置づけた小学校の音楽教育の最大の欠点であった、ハーモニーを支える低音の圧倒的な不足と、リード楽器と笛だけというバラエティの少なさ(中学でも同じ)を画期的に豊かにしたあのアンサンブル・オルガンは歴史に残る一歩だったでしょう。

しかし最近になって、かつて研究指定校としてアンサンブル・オルガンを使って発表した多くの小学校でそれらが使われていないか廃棄されたという話を聞きます。子どもが廃棄するわけがありませんから、結局使い切れない教師やアイデアの枯れた教師の都合でそうになっていったと考えざるを得ません。

多くの音楽教師は、音楽大学や教員養成課程の音楽専攻の結果ライセンスを獲得してきました。彼(女)らの多くはアンサンブル・オルガンのようなシステムを大学で経験していません。生のオーケストラやバンドの経験者はその経験を生かしてクラブ活動の指導をしますが、正規の授業の中でそのような活動は不可能です。

学習指導要領が示す音楽教育の理念は「育てる」「養う」「培う」の目標を掲げてはいるものの、ただ専門的レベルより大幅に譲歩したレベルを目標としているに過ぎず、「この程度で良い」という妥協の産物です。

その結果、専門性の高い教師ほど正規の授業に対するビジョンが乏しくなり、反対にクラブ活動にその情熱を傾けることになります。

そのような教師の目の前にあるハイテク楽器は自分の歴史にもなく、言い換えれば自分の感動体験の記憶にそれらが存在せず、あったとしてもロックのライブであったりして直接自分の教育プランには重なりません。

その結果仮にアンサンブル・オルガンのようなシステムを授業で使っても「棒読み」のような無表情で無感動な表現をどうすることもできません。打つ、はじく、擦る、吹く等の直接的動作を伴わない楽器を棒読みから脱却させるにはどうすればよいのでしょうか。